

ことばの学び

KOTOBA NO MANABI



LETTER
3

特集 書くという行為

他者のことばとの出会い
福岡教育大学 教育学部 河野智文
成二五年四月に実施された全国学力・学習状況調査「中学校国語B」では、小説を読んでもないが感じたことや考えたことを、引用などの条件にしたがって書くことが求められた。解説資料の「予想される誤答類型」のひとつに「……がすごいと思いましたが、これは「感じることが考えたことが具体的に書かれていない」ため、不十分だとされている。理解行為である「読むこと」の達成度は、表現することによって測られる。わかっていても、それを表現することが

できないならば、わかっていないと評価される。しかし、思いや考えはあるものの、それを表現することばが見つからずに苦しむことは多い。ことばの学びの途上にある学習者であれば、なおさらのことだ。やはり、「無い袖は振れぬ」表現のための語句をあらかじめ与えることに、もっと寛容でありたい。学習者には与えられた語句を選んだり組み合わせたりすることを通して、なぜその語句がぴったりだと判断したのか、理由を説明できるようにすることを望む。さらには、いちど出会った語句を別の場面で使ってみようとしてほしい。そのうちには、「先生の示す語句は使わないで書いてみたい」という頼もしい声も、聞こえてくるようになってほしいと思う。教科書にあるのも、先生や

友達のもの、他者のことばである。自分のことばを豊かにするために、他者のことばと出会いが欠かせない。書くことの学習に交流が、不可欠であるゆえのひとも、ここにある。今日はどんなことばに出会えるか、という思いで、友達の記事や発言に関心をもってほしい。また、教科書が、日常生活ではなじみの薄い、抽象的なことばと出会う場になってくれればとも願う。ことばの学びとは、他者のことばとの出会いを通して、自分のことばを増やし豊かにすることばなみだという素朴な事実には、あらためて気づかされる。それはもちろん、彼らのものの見方の広がりや、ことばによるコミュニケーションへの信頼の育成につながる。

GUEST COLUMN

私の「国語」は
日本語

小説家・温 又柔

子どもの頃は、好きな科目は？と聞かれると迷わず、こくご、と答えた。

特に、作文の時間が好きだった。原稿用紙が配られると、たちまち升目を埋めた。一枚では足りない。二枚にも収まらない。原稿用紙をせがむ私に、あなたには書きたいことがたくさんあるのねえ、と先生が嘆息する。

書く、というよりも、どちらかといえば、喋る延長で、私は鉛筆を動かしていた。口を動かすときの速度で書こうとするから、文字どおり、息つく間もない。最後の句点「。」を打ったあとは、水から陸にあがったときのように、たっぷりと息を吸った。

文字を知り始めた頃の私にとって、字を書くこと、とは、声を記すこと、だった。この世には、ひらがなをはじめ、文字なるものが存在する。発した瞬間、ただ流れ去るしかなかった自分の声や、文字を書けば、誰の目にも見える形として、紙の上にあらわされる。

そのことが、面白くてたまらなかった。年齢が2桁になるのを喜んだ小学四年生の時には、自分の声を忠実に写し取ることだけが書くという行為の全てではない、と知っていた。たぶん、本を読んでいるうちに気がついた。

文字は、書くことと共に読むことも私にもたらしたのだ。

本の中には、自分の気持ちをどんな言葉にしたいのか、お手本がたくさん

あった。私は本を真似ながらどんどん書いた。声を文字で射とめたように、気分や感情を文章として紙の上に留めていった。

中学生になっても私は、国語、それも作文の時間が相変わらず好きだった。英語の課題で、好きな「subject」について書くときも、辞書で「国語」と調べた。当時の私にとって、「国語」といえば、数学や理科や社会のような科目の名称のことだった。

しかし、「国語」とは元々、その国の言語、という意味を持つ。だから、どの国の「国語」なのかによって、その中身は当然異なる。たとえば日本で「国語」の役割を担う言語は、英語に翻訳するとJapaneseだ。Japanese!

思えばそれは、自分がふだん読んだり書いたりしている言葉が、日本語である、と初めて意識させられた瞬間だった。

私の「国語」は日本語。自分が日本人だったとしても、この発見に新鮮な感動を覚えたはずだ。けれども私の場合、もう一つの重要な発見が同時にあった。

台湾で育っていたら、私の「国語」は中国語だった？ そのことを、中学生の私は、日本語で考えている。私は台湾人だったが、「国語」としての日本語と共に育ちつづけた。そして、大人になった今でも、「国語」として習得したこの言語は、私が、読み、書き、考えるとき、最も頼りとする杖なのである。

おん・ゆうじゅう(Wen Yuju)

1980年、台北に生まれ、3歳より東京に住む。両親はともに台湾人。2011年、集英社より『来福の家』を刊行。白水社ウェブサイトにエッセイ『失われた「母国語」を求めて』を連載中。

特集 書くという行為
2014年8月15日発行
〈編集・発行人〉北口 克彦
〈発行所〉株式会社三省堂
〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14
電話 03(3230)9446(編集) / 9551(営業)
〈WEBサイト〉http://tb.sanseido.co.jp/

ことばの学び

KOTOBA NO MANABI

—デザイン 宮内 佑 / 表紙イラスト 沢田 藍子 / ひと図鑑イラスト 藤塚 尚子

コピーライティング

—ことばの力で引きよせる—

ミニ アクティビティ



時間

約45分



合唱コンクール、文化祭、体育祭などの行事やクラスの標語を創作する。

活動内容



手順

- 個人やグループでアイデアをたくさん出し合う。
- 個人やグループで案を練りこんで絞る。
- コンテスト(投票)を行い、1つに決定する。
(1つに絞らず、1人1コピーとして小さな紙に書いたものをコラージュして、クラスやグループで1つの作品として掲示するのもおもしろい)

コピーづくりの技

- ◆ **体言止め**
例) 歌でつなく地域の心、私たちの新提案。
- ◆ **方言**
例) けっぱれ! 三中。/ 聞いてみんさい、踊ってみんさい。
- ◆ **象徴・比喩**
例) 歌はビタミン / 北の大地につむがれる熱烈感動物語 / 2年1組まるかじり!
- ◆ **韻・対句・繰り返し・語呂**
例) 優勝旗 燃える心で つかみとれ / いい日、いい歌、いい笑顔。 / 声出せ! 汗出せ! 力出せ!
- ◆ **倒置**
例) 響け、歌声。 / 聞いてください、魂の叫びを。
- ◆ **パロディ(もじり)**
例) 一歌一会 / 天高く、歌響く秋
- ◆ **ビジュアル** *カタカナ、ひらがな、漢字、英語、句点、読点、カッコなどを効果的に用いる。
例) 談・暖・団。 / GOING舞WAY

ほかにもさまざまな工夫が考えられます。

また、複数の技が組み合わせられたコピーもあります。

それぞれのコピーにどんな技が使われているかを確認しながら進めましょう。

